



Title	ゼムストヴォ医師としてのアントン・チェーホフ
Author(s)	左近, 幸村
Citation	パブリック・ヒストリー. 2004, 1, p. 113-129
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66417
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ゼムストヴォ医師としてのアントン・チェーホフ

左近幸村

はじめに

『桜の園』『かわいい女』などの作品で知られる作家、アントン・チェーホフ（1860-1904 年）は、同時に医師でもあった。特に 1892 年には、当時ロシアで流行していたコレラの防疫に活躍した。このときチェーホフは、1864 年に設立された、帝政ロシアの地方自治組織ゼムストヴォに雇われた医師であった。本稿は、ゼムストヴォ医師としてのチェーホフ、特に 1892 年の活動を見る。1892 年のコレラ流行は、90 年のゼムストヴォ法改正、91 年の大飢饉と並んで、ゼムストヴォの転換点の 1 つとなった。これをきっかけに、ゼムストヴォは帝政末期のロシア社会に大きな位置を占めるようになったと理解されている。

帝政末期のロシアを考える上で、ゼムストヴォの役割は重要である⁽¹⁾。その理由は、1 つにはこの組織が、ロシアにおける立憲主義的な運動の苗床になったと見られているからである。ゼムストヴォの中にいた自由主義的な貴族は、1905 年革命の際に大きな役割を果たした。また、二月革命の結果成立した臨時政府の最初の首相リヴォーフ公は、ゼムストヴォ連盟議長であった。ゼムストヴォが政治の表舞台に出ることは法律によって禁止されていたのだが、次第に無視されるようになっていた。

しかし最近では、ゼムストヴォの政治的な役割よりも、よりミクロなレベルでの、ゼムストヴォが地域社会や農村において果たした役割の方が注目されている。こうした傾向の背景には、社会史の流行や、自由主義的価値の相対化、といったことが挙げられる。つまり、国家による統制からより自由で自立した地方自治への進展を理想とする見方に対して、異議が唱えられるようになり、国家による地方行政の統制を、一概に悪いものではないと見なすようになった。また、そもそもゼムストヴォの貴族の運動を、自由主義的と見なすことについても疑問が出されるようになった。むしろそうした政治的役割よりも、ゼムストヴォが帝政末期の地域社

(1) ゼムストヴォについては以下を参照。K. Matsuzato (ed.), *Zemskii fenomen: Politologicheskii podkhod*, Sapporo, 2001; T. Emmons and W. S. Vucinich (eds.), *The Zemstvo in Russia: an Experiment in Local Self-Government*, London, 1982. 松里公孝「帝政ロシアの地方制度 1889-1917」『スラブ研究』40 号、1993 年、167-183 頁。

会において果たした役割の方が、重要だったのではないかと、近年では考えられている。ゼムストヴォは本来地域社会の医療や教育、農業問題などに携わる組織であり、そのために多くの専門職知識人を雇っていた。設立当初、ゼムストヴォの地域社会における活動はなかなかうまくいかなかったが、転機になったのが、91年の飢饉、92年のコレラ流行であった。ゼムストヴォの社会事業が、地域に浸透し始めるのは、このときからであるとされている。

ゼムストヴォの社会的役割について知るには、ゼムストヴォの組織像を押さえておく必要がある。ゼムストヴォは1864年から帝政崩壊までの半世紀間、発展と変容を続けるが、大体次のように理解しておいてもらえばよい。

ゼムストヴォが設置されたのは、基本的にヨーロッパ＝ロシア地方であった。当時のロシアの行政区画は、上から順に県、郡、管区、郷、村となっていた。県といっても北海道やヨーロッパの小国ほどの大きさがあり、郡は現在の日本の県ほどの大きさがあった。ゼムストヴォの基本となったのは、郡レベルでの議会である。議員は身分ごとの選挙で選ばれ、農民も議員になることが可能だった。郡の執行機関である郡参事会、および県レベルのゼムストヴォの議員は郡の議員の互選で選ばれた。こうした役職には貴族議員が多く選出された。定例議会は年に一回、郡レベルが秋季、県レベルが12月から1月にかけて行われるのが、通常であった。参事会は一年を通して活動した。ただし中央政府の意向に逆らうことは、前述のように、原則として許されず、議員の構成比も貴族議員の割合が高かった。しかも1890年のゼムストヴォ法改正により、この傾向が強まることになる。とはいえ、ゼムストヴォは住民の行政への参加を認めていたため、皇帝専制の統治システムにとって、「継子状態」だった⁽²⁾。ゼムストヴォは中央政府の単なる出先機関ではなく、むしろそれらと対になる存在だったといえる。

その結果、ゼムストヴォが帝政末期のロシア社会において果たした役割は決して小さくなかった。特に近年の研究では、ゼムストヴォが雇っていた数多くの専門職知識人に注目が集まっている。彼らは帝政末期のロシアに出現した、近代的な中間層だった⁽³⁾。ゼムストヴォの専門職知識人は、農村における教育の普及、農業の発展、医療状態の改善などに大きな役割を果たした。

特に医師に関しては、次に挙げる2つの理由から注目されている。第一にその役割の広さである。当時の医療水準からすれば、医師たちは、住民の衛生教育や病気の予防活動を重視しなければならなかった。このため彼らは、医療活動を行うだけでなく、教育者や農村研究者としての活動も行った。第二に、当時のロシアの専門職全体を見た場合、医師というのは最も職業意識やアイデンティティの確立に成功した存在とみなされているからである⁽⁴⁾。医師たちは

(2) 加納格『ロシア帝国の民主化と国家統一—二十世紀初頭の改革と革命』御茶の水書房、2001年、33頁。

(3) C. E. Timberlake, "The Zemstvo and the Development of a Russian Middle Class", in E. W. Clowes, S. D. Kassow, and J. L. West (eds.), *Between Tsar and People: Educated Society and the Quest for Public Identity in Late Imperial Russia*, Princeton, 1991, pp.164, 179.

(4) K. E. Bailes, "Reflections on Russian Professions", in H. D. Balzer (ed.), *Russia's Missing Middle Class: The Professions in Russian History*, M. E. Sharpe, 1996, pp.46-48.

1883年に全国規模の職業団体であるピロゴフ記念医師協会を設立した。これはロシアで初めて麻酔手術を行うなど、ロシア医療の進展に大きく寄与したN. I. ピロゴフ（1810-1881年）を称えて作られた団体で、彼の意思を引き継ぎ、農村における教育活動、体刑廃止運動、そしてもちろん医療技術の進展などを目指した。1905年革命以前にこのような全国規模の職業団体をもった集団はまれである。彼らの活動は学校教師など、他の集団のモデルとなった。本稿がチェーホフを対象に選んだのも、彼がゼムストヴォに雇われた医師だったからである。

ゼムストヴォ医師について最もまとまった研究は、ナンシー・フリーデンの『改革と革命の時代におけるロシアの医師たち、1856-1905年』⁽⁵⁾である。ロシア本国でも、ここまでまとまった研究はないと思われる。この中でフリーデンは、クリミア戦争の衝撃によりロシアで医療制度が整いはじめてから、医師たちが社会的に発言力を持つようになり、1905年革命後、医師たちの活動が下火になるまでを扱っている。

フリーデンが描くのは、医療と政治の複雑な関係である。フリーデンは、ゼムストヴォの医師たちの大部分は、決して革命運動と積極的にかかわろうとしなかったことを強調する⁽⁶⁾。しかし彼らは結果的に、当時のロシアの自由主義的な運動とかかわりをもつようになった。そのきっかけとなったのが、1892年のコレラの流行である。このときゼムストヴォの医師たちは、医療活動を進める際に必要な職業上の権限が欠如していることに気がつき、社会に対して発言するようになる。しかしゼムストヴォ医師の社会的発言や政治的活動も、1905年革命の後に政府によって弾圧され、終息していく。医療と政治の関係を描いたフリーデンの研究は、ここで終わっている。

しかし、1905年をゼムストヴォ医療、あるいはゼムストヴォの活動全般の絶頂と見ることは、近年異論が出されている。松里公孝によると、ゼムストヴォの社会事業はむしろ1905年以降に大きな進歩を見せたのであった⁽⁷⁾。1905年革命でゼムストヴォから反体制派が追放されたことをもって、ゼムストヴォの社会的役割が終わったとするのは早計だというのである。確かに、1905年革命以降にゼムストヴォと政治運動が切り離されたことで、ゼムストヴォの社会事業がよりいっそうの進展を見せたという松里の主張には、首肯しうるものがある。

フリーデンはおそらく、否応なしに時代の波に飲み込まれていき、時の自由主義的政治運動と深くかわらざるをえなくなった、医師たちの運命を描きかかったのだろう。したがってフリーデンの研究に主に登場するのは、社会的にも大きな影響力をもった医師たちである。冒頭で、ゼムストヴォの研究が政治史的観点から社会史的観点に移行していることを指摘したが、フリーデンの研究はちょうどその中間点にあるものといえる。

(5) N. M. Frieden, *Russian Physicians in an Era of Reform and Revolution, 1856-1905*, Princeton, 1981.

(6) *Ibid.*, pp.12-13.

(7) 松里公孝「総力戦争と地方統治—第一次世界大戦期ロシアの食糧事業と農事指導」東京大学大学院法学政治学研究科博士論文、1996年、60-62頁。

ゼムストヴォ医師についてまとめた日本の研究には、青木恭子のものがある⁽⁸⁾。青木は D.N. ジバンコフ（1853-1932 年）という、一人のゼムストヴォ医師に焦点を当てることにより、革命運動とは違った形で社会問題に取り組んだ知識人の姿を描いている。青木はフリーデンの研究をベースにしながら、そこに「雑階級人」と「小さな行い」という 2 つの要素を付け加えている。この 2 つは本稿でも大きな位置を占めるキーワードなので、後で詳しく解説する。ただ青木はもともと帝政期の農村の研究者であり、最終的な関心はゼムストヴォ医師そのものよりも、彼らを通して見える農村の方にあるようだ。

以上の先行研究をまとめると、ゼムストヴォの転換点は 2 つあったことになる。1 つは 1891 年から 92 年にかけてであり、もう 1 つは 1905 年である。フリーデンは 92 年以降ゼムストヴォの社会事業が発展し、1905 年革命で挫折したとする。青木は 1905 年革命には特別言及していないが、基本的にフリーデンの見方を踏襲している。これに対し松里などは、91 年から 92 年に最初の発展の契機があり、1905 年革命を第二の発展の契機と見る。いずれにしろ、91 年から 92 年を発展の契機と見る点では、両者は一致している。ただそれならば、92 年のコレラ流行は、もう少し研究されてもいいだろう。91 年の飢饉、92 年のコレラ流行こそ、ロシア社会全体にゼムストヴォの事業を拡充させる必要性を知らしめたからである。飢饉や疫病の流行を防ぐには、地方行政の充実が不可欠だった。

しかし、松里はもともと第一次大戦下の農事指導に関心があるので、この時期のゼムストヴォについてはあまり言及していない。青木も、ゼムストヴォ医師を直接扱っているわりには、92 年のコレラ防疫にあまり触れていない。92 年のコレラ防疫を一番綿密に描いているのは、フリーデンである。本稿では、「雑階級人」や「小さな行い」という近年の研究の成果を応用して、チェーホフのコレラ防疫を考察する。

コレラ防疫前後のチェーホフの書簡から見えるのは、ゼムストヴォ事業の劇的な変化ではなく、むしろ連続性である。チェーホフは、コレラ防疫の前も後も、ゼムストヴォの社会事業について、疑問を投げかけ、不満を抱いている。だがチェーホフは、不満を漏らしつつも、ゼムストヴォの社会事業にかかわりつづけた。それはコレラ防疫を通して、ゼムストヴォにとどまる必要性を認識したからである。チェーホフの中にある、ゼムストヴォへの相反する評価を通して、ゼムストヴォが当時のロシア社会の中に占めた位置、ならびに、チェーホフのようなゼムストヴォ医師の心性を確認することができる。

(8) 青木恭子「ゼムストヴォ医師という存在―帝政末期ロシア社会史の史料としての可能性」『富山大学人文学部紀要』34 号、2001 年、79-91 頁、同「ドミートリー・ニコラエヴィチ・ジバンコフ（1853～1932）―あるゼムストヴォ医師の生涯とロシア社会」『富山大学人文学部紀要』35 号、2001 年、59-82 頁。

(9) 例としては青木恭子「帝政末期ロシアの農民世帯分割と「土地不足」」『富山大学人文学部紀要』38 号、2003 年、129-153 頁、同「出稼ぎと財産と世帯分割―農奴解放から革命までのロシア農民家族に関する最近の研究」『スラブ研究』45 号、1998 年、319-332 頁。

1 雑階級人と小さな行い

それではまず、「雑階級人」と「小さな行い」という言葉について、整理することにする。

チェーホフを医師の例として見る場合、彼が高名な作家でもあり、後には地主にまでなったという点に注意しなければならない。これは祖父に農奴をもつ身としては、「例外的な」大出せといえるだろう。しかしチェーホフが「例外」になれたのは、もちろん彼のたゆまぬ努力があったとはいえ、一方でそうした「例外」を生み出すだけの流動性を当時のロシア社会がもっていたからである。

チェーホフは親しかった新聞社主 A. S. スヴォーリンに宛てた書簡（1889 年 1 月 7 日付）の中で、次のように述べている。

「貴族の作家が生まれつきもっているものを、雑階級人の作家は青春を犠牲にして買うので⁽¹⁰⁾す」。ここに出てくる「雑階級人 *raznochinetsy*」という言葉こそ、帝政末期のロシア社会を象徴するものである。雑階級人とはもともと、逃亡農民など既存の身分秩序からはみ出したアウトサイダーを指す言葉であり、18 世紀初頭から使われていた。しかし 19 世紀には教育により出世した平民出身の人々を指すようになった。近年、雑階級人は帝政末期の社会の流動性を端的に示す人々として、注目を集めている。ゼムストヴォの下で働いていた専門職知識人の中には、数多くの雑階級人が含まれていた。チェーホフも、父が雑貨商という平民であり、高等教育を受けて出世したという点ではまさしく典型的な雑階級人であった。またジバンコフも事実上町人身分の出身であり、高等教育により出世したという点では、彼自身は自称しなかったが、雑階級人である。

アントン・チェーホフは農奴解放の前年、1860 年にアゾフ海沿岸の港町タガンローグで 7 人兄弟（うち女性が 2 人。アントンにとっては両方とも妹）の 3 男として生まれた。家庭内の父は専制君主であったが、同時にきわめて教育熱心な人であった。チェーホフはタガンローグのギムナジアから、1879 年にモスクワ大学の医学部に入学し、翌年には文壇デビューを果たしている。ただしチェーホフが在学中から作品を書きはじめたのは、父が事業に失敗し、家計を助けなければならないという事情があったからである。

ここで、雑階級人を生みだした 19 世紀後半のロシアの教育システムについて、解説しておく⁽¹²⁾。大改革期以前は身分ごとに通う学校が決められており、ギムナジアは貴族・官吏身分の子弟が優先であった。しかし 1864 年に教育方針が改められ、ギムナジアにも平民身分の出身者

(10) A.P. Chekhov, *Polnoe sobranie sochinenii i pisem: Pis'ma*, vol.3, Moscow, 1976, p.133.

(11) 「雑階級人」については E. K. Wirtschafter, *Structures of Society: Imperial Russia's "people of Various Ranks"*, Northern Illinois, 1994 を参照。

(12) 帝政末期のロシアの教育システムについては、以下の文献を参照。ダニエル・R・ブローワー「ロシア高等教育の社会的成層化」コンラート・ヤーラオシュ編（安原義仁他訳）『高等教育の変貌 1860-1930』昭和堂、2000 年（原著は 1983 年）、242-259 頁、橋本伸也「19 世紀後半ロシアの学校—アントン・チェーホフの小品を手がかりとして」中内敏夫他編『人間形成の全体史—比較発達社会史への道』大月書店、1998 年、239-260 頁。

が多く通うようになる。1880年代、いわゆる「反改革」によって、一時的に教育の身分化政策も復活するが、20世紀にはもはや貴族・官吏身分は、ギムナジアでの優位を保てなくなった。

ギムナジアはもともと、官吏養成機関としての意味をもっていた。実際、平民出身でありながらギムナジアから大学に進学し、官吏になって貴族身分を勝ちえたものもいる。しかしこの当時、ギムナジアはもう1つの意味ももつようになっていた。それは専門職知識人の養成所としての役割である。背景には、ゼムストヴォが創設され、専門職知識人の需要が高まっていたということが、指摘できる。概して貴族身分出身者が官吏を目指したのに対し、平民身分出身者は専門職の知識を身につけようとした。典型的なのが医学部であり、全学生の中で貴族身分出身者が占める割合が46.7%だったのに対し、医学部は39.4%であった⁽¹³⁾。チャーホフが医学部を選んだのも、当時としてはごく普通の選択だったといえる。こうした教育システムが、雑階級の専門職知識人を育てた。

さらに専門職知識人になることを後押ししたのが、「小さな行い *malye dela*」理論である⁽¹⁴⁾。「小さな行い」とは、70年代から始まった運動で、革命運動を否定し、専ら農民の文化啓蒙活動に重点を置いた。「小さな行い」という言葉は、もともと革命運動に積極的な人々からつけられた蔑称である。しかし80年代には、「大きな行い」である革命運動の限界が明らかになっていった。多くの青年知識人が「ヴ・ナロード」を合言葉にして農村に入り、革命理論を農民に説いたが、農民には受け入れられなかった。テロルはアレクサンドル2世の暗殺に成功したが、後を継いだアレクサンドル3世はより保守的な人物で、事態は彼らの思う方向に向かわなかった。そうした中で「小さな行い」は多くの知識人の支持を得ていくのである。

80年代中頃から90年代初頭にかけて「小さな行い」はIa. V. アブラーモフ（1858-1906年）により理論として発展する。アブラーモフは町人身分の出身で、若いころ非合法文学にかかわり逮捕されている。しかしその後はゼムストヴォの統計局に身を置きながら、ロシア社会の文化啓蒙に努めた人物である。彼は革命理論では民衆を救えないと感じ、マルクス主義や、当時代表的なナロードニキ主義の理論家であったN. K. ミハイロフスキー（1842-1904年）を批判した。アブラーモフにしてみれば、マルクス主義にしるナロードニキ主義にしる、革命によって社会を大きく変革しようとする理論は、しょせん知識人の間でしか通用しないものであり、民衆に訴える力を欠いていたのである。

アブラーモフが知識人に呼びかけたことは、ゼムストヴォで文化啓蒙活動に努めることだった。確かにゼムストヴォが用意した医療、教育、統計、農事指導といった場は、まさしく格好の文化啓蒙の場であった。

チャーホフも医学部で衛生学や精神病理学を学ぶかわら、このころからすでに仲間たちと、

(13) 橋本、前掲論文、254頁。

(14) 「小さな行い」については、以下を参照。S. Ia. Novak, "Ia.V. Abramov-pioner «teorii malykh del»", in *Otechestvennaia istoriia*, 1997, No.4, pp.80-85; V. V. Zverev, "Evolutsiia narodnichestva: «teorii malykh del»", in *ibid*, pp.86-94.

人々の救済に医師ができることについて議論していた。チェーホフの同僚の医師であった、P.I. クールキン（1858-1934 年）は学生時代を回想して次のように述べている。

「医師たちが常に心の奥底で思っていたこと—それはあらゆる病気の老人、貧乏な老婆、衰弱した女性等々のもとへ向かうことであった。＜中略＞このような大衆人民への人道的な態度に私は衝撃を受け、強くひきつけられた。私の心が求めていたのは、まさしくここ、村の診療所の地味な環境であって、ペテルブルグの大学の教室でも科学の殿堂の研究室でも、首都モスクワの大学病院でもなかった⁽¹⁵⁾」。

こうした人道主義への憧れは当時の医学生に共通のものであった。チェーホフもまたそうした理想を抱いた1人であった。

1884 年、チェーホフは医学部を卒業するが、同年処女出版も行っている。この後チェーホフは、徐々に作家としての名声を確立していく。特に 1887 年 11 月に初演された戯曲『イワーノフ』は成功を収め、作家としてのチェーホフの名を一躍高めた。これは理想を持って農村に戻った地主イワーノフが、社会事業に失敗して自殺する話で、高い理想を掲げてでもそれを実行できない典型的な「余計者」を扱った作品といえる。19 世紀ロシア文学に特有な「余計者」問題は、ロシアにおける知識人と民衆の乖離を象徴する問題であり、プーシキン、ツルゲーネフ、ドストエフスキー等々多くの文豪が取り組んできた。例えば、20 世紀初頭に活躍した哲学者ニコライ・ベルジャエフ（1874-1948 年）は、次のように述べている。

「知識階級、教養ある人々は農民には外国人として映った」。

「教養ある階級、インテリゲンツィアにとって民衆（ナロード）は解明しなければならない一種の神秘であった⁽¹⁶⁾」。

ここにはインテリゲンツィアとナロードの乖離が端的に表れている。チェーホフが「余計者」問題に無関心でなかったことは『イワーノフ』のような作品を書いていることから分かる。実際『イワーノフ』は、批評家たちから典型的な「余計者」の作品として受け止められた。ただチェーホフの場合、トルストイやドストエフスキーとは少々立場が違っていた。トルストイやドストエフスキーが貴族階級出身であったのに対し（ただしドストエフスキーの家はかなり小貴族であった）、チェーホフはあくまでも雑階級人であった。チェーホフのような雑階級人は、少なくとも大学で学んでいる間は、先達のような民衆との乖離を想定していなかった。そして彼らは革命運動よりも「小さな行い」により、自らの知識を人々の役に立てようとする。チェーホフも終生革命運動とかかわろうとしなかった。

しかし革命運動を否定して農村に入り、人々に奉仕しようとしても、事はそう簡単には進まなかった。知識人として農村に向かった雑階級人たちは、そこで初めて民衆との乖離を痛感させられる。彼らが描いていた理想は、ナイーヴなものだった。西欧医学をロシアの伝統的な農村社会に持ち込もうとしたゼムストヴォ医師たちも例外ではない。次にその様子を見てみよう。

(15) N.M. Pirumova, *Zemskaia intelligentsiia i ee rol' v obshchestvennoi bor'be do nachala XXv*, Moscow, 1986, p.224.

(16) N.A. Berdiaev, *Istoki i smysl russkogo kommunizma*, Moscow, 1990, pp.13-14.

2 ゼムストヴォ医師の現実

「小さな行い」を提唱したアブラーモフは、1889年の著書『ゼムストヴォの行い：ロシアゼムストヴォの活動の概観』の中で、次のように述べている。ゼムストヴォによる民衆の健康管理については、2つの正反対の意見がある。一方は、これこそゼムストヴォの最も重要な部分として、重要視する見方。もう一方は、ゼムストヴォのような科学的な医療がなくても、民衆は今も昔も変わりなく暮らしているのだから、ゼムストヴォ医療など無駄であるという見方である。⁽¹⁷⁾ アブラーモフは当然、前者の見方に立ってゼムストヴォ医療の必要性を説いている。だが同じ本の中で、アブラーモフは次のようにも述べている。

「ゼムストヴォの医療活動の主要な課題は、おそらく**民衆の治療**（原文イタリック）であろう。この課題は一般に思われているように、決してどうでもいいものではない。

この点に関して、驚くべき誤解が広まっている。病気の発生の根本的な原因にそって治療することは、ダナオスの娘が樽に水を汲むことと一緒だというのである」。⁽¹⁸⁾

こうした記述からも、ゼムストヴォ医療に対する理解がなかなか得られていなかったことが推測できるだろう。人々は医師の活動に理解を示そうとせず、医師も満足な仕事ができるような状況になかった。まず医師たちは単純に貧しかった。チェーホフの場合も、収入は文学が中心だったことはよく知られている。また1890年の時点で平均34,927人の住民につき1人のゼムストヴォ医師しかいないという有様だった。⁽¹⁹⁾ このような過酷な労働条件のため、ゼムストヴォ医師は他の医師よりも早死にすることが多かった。⁽²⁰⁾

ゼムストヴォ医療は、もともと次の4つの原則をもって仕事にあたっていた。⁽²¹⁾ ①無料診療②国家ではなく地方自治組織による住民の健康管理③農民の近代医療に対する信頼の獲得④衛生教育と予防医療の徹底。

①はゼムストヴォ医療の最も優れた点として、国際的にも賞賛されていた。⁽²²⁾ だがこれは単に人道的な観点からのみとられた策ではなく、そもそも貧しい農民から直接診療報酬を取ろうとするのが無理だったから、という事情もあった。また無料診療という制度は、ゼムストヴォ医師の立場を複雑なものにした。無料診療は、ゼムストヴォという行政組織の支援なしには実現し得ない制度であり、このため医師たちはゼムストヴォの命令に服従を余儀なくされた。ゼムストヴォの思惑と医師たちの思惑が食い違って、対立が表面化することもあった。そしてこの問題は②とも関連する。ゼムストヴォは確かに地方自治組織であったが、実際はツァーリ政府

(17) Ia.V. Abramov, *Chto sdelalo zemstvo i chto ono delaet: obzor deiatel'nosti russkogo zemstva*, St. Petersburg, 1889, pp.3-4.

(18) *Ibid.*, p.27. 「ダナオスの娘」とは、ギリシア神話で、無駄なことのたとえ。

(19) Freiden, *op.cit.*, p.158.

(20) *Ibid.*, pp.126-127.

(21) S. C. Ramer, "The Zemstvo and public health", in *The Zemstvo in Russia*, pp.279-280.

(22) 青木「ゼムストヴォ医師」、81頁、松里「帝政ロシアの地方制度」、170頁。

の統制下に置かれていた。しかも 1890 年前後にはゼムストヴォの仕組みに手が加えられ、この統制がより強まることになる。典型が 1889 年のゼムスキー・ナチャーリニク制の導入である⁽²³⁾。これは県知事に任命された地域の貴族が、司法権と行政権を併せもって農民を監督するシステムであり、国家官僚制の末端に位置するものだった。ゼムスキー・ナチャーリニクはゼムストヴォとともに地方行政の重要な担い手となる。したがって、ゼムストヴォ医師たちは国家とのかかわりも意識せざるをえなくなった。

さらにゼムストヴォ医療を考える上で重要なのが、③と④である。当時のロシアの医療水準からすれば、コレラやジフテリアなどの疫病の蔓延を防ぐには衛生教育を徹底し、疫病の原因を早めに除去するのが一番効果的であった。必然的にゼムストヴォ医師は、医療以外の農民の生活全般にかかわらざるをえなくなった。しかしその道のりは決して平坦だったわけではない。むしろ医師たちは農民の無理解や誤解に苦しまれることになる。医師が仕事のために病気を広めていると思われることさえあった。ゼムストヴォ医師は孤独感にさいなまれた。彼らは文字どおり、農村社会における「余計者」であった。

しかも医師が農民の生活に深くかかわることを、ゼムストヴォは好まなかった。ゼムストヴォにしてみれば、医師は医療活動にだけ専念してもらいたかったのである。結局ゼムストヴォ医師は、ゼムストヴォ当局からも農民からも見放された存在となってしまった。

こうして農村に入ったゼムストヴォ医師は、ひどい無力感に襲われた。チェーホフの作品に登場する医師たちも、無力な存在として描かれる場合が多い。例えば『妻』(1891 年)では、主人公が物語の始まりの方で、ゼムストヴォ医師を非難している。それは、彼らは何もできないくせに、貧しい人から俸給をもらって、偉そうな理屈をこねているからである。『六号室』(1892 年)の場合はもっとはっきりしていて、主人公のゼムストヴォ医師ラーギンは極めてニヒルで、人生をあきらめきった人物として描かれる。彼は思う。この四半世紀の間に医学は急速に進歩した。それにもかかわらず、罹病率も死亡率も昔と変わらない。自分も含めたゼムストヴォの職員などというのは有害な存在で、俸給をただ取りしている。

チェーホフはコレラ防疫の時に、ゼムストヴォからの俸給の受け取りを拒否している。こうした作品を見てみると、なぜ俸給を拒否したのかが明らかになる。もちろん当時のチェーホフには芝居の上演料や小作料といった医学以外の収入源があった。しかしそれだけではなくチェーホフはゼムストヴォ医療、あるいは医学そのものの力に不信感を抱いていたのである。どんなに医療活動をして、結局は人々の役に立っていないのではないかという疑念が心のど

(23) ゼムスキー・ナチャーリニクについては、以下を参照。P. N. Zyrianov, "Sotsial'naiia struktura mestnogo upravleniia kapitalisticheskoi Rossii, 1861-1914gg", in *Istoricheskie zapiski*, No.107, 1982, pp.261-272; T. S. Pearson, *Russian Officialdom in Crisis: Autocracy and Local Self-Government, 1861-1900*, Cambridge, 1989, pp.164-209; D. A. J. Macey, "The Land Captains: a Note on their Social Composition, 1889-1913", in *Russian History*, vol.16, nos.2-4, 1989, pp.327-351.

こかにあった。したがって、医学で収入を得ることは彼にはできなかった。⁽²⁴⁾ここから、「小さな行い」の実践の場としてのゼムストヴォが、実際には様々な課題を抱えていたことがわかる。

しかし「小さな行い」自体も、ジレンマを抱えていた。それをよく表しているのが 1898 年に発表された『往診中のこと』である。この作品はチェーホフがゼムストヴォ医師として各地の工場を回った時の体験がもとになっているといわれる。この中で、医師コロリョーフは診察に行った先の工場で、労働者たちに会う。彼は自分たちの努力にもかかわらず、労働者の外見が、彼が子どものころと少しも変わっていないことに気づき、次のように考える。

「彼は医者として、慢性疾患を、根本的な原因も分からなければ、治りもしないと正確に把握していた。工場についても、その原因は明らかにもできなければ、取り除くこともできない誤解のようなものと見ていた。工員たちの生活のあらゆる改善も、余計なこととは思わなかったが、不治の病の治療と同じものだと見なしていた」⁽²⁵⁾。

「小さな行い」により、農民や労働者の生活を根本的に改善することは無理だった。チェーホフにとってそれは、「不治の病の治療」だった。しかし「大きな行い」に走ることもできなかった。結局「不治の病」とはいえ、医師として患者を放っておくわけにはいかず、チェーホフは無力感にとらわれながらも、人々の生活の改善に努めなければならなかった。

だが筆者としては、ここでゼムストヴォ医師の方の問題点も指摘しないわけにはいかない。例えば 1860 年代から 70 年代にかけて、ゼムストヴォと医師たちは診療の仕方を巡って、対立した。この時、ゼムストヴォ側は巡回診療を主張したのに対し、医師たちは一人当りの担当地区があまりにも広いことを理由に、定置診療を主張したのである。⁽²⁶⁾医師たちの主張に素直に耳を傾けることも可能だろうが、現在の常識では、医師の数が少ない場合は巡回診療をするというのが基本のはずである。ここに医師たちのある種の「傲慢さ」が表れてはいないだろうか。

チェーホフも、『妻』において典型的なように、医師をしばしば傲慢なものとして描く。それは彼自身の目に映った医師像であっただろうし、自戒の意味もあっただろう。チェーホフ自身書簡の中で、次のように述べたことがある。

「ああ、病人にどれだけ嫌気がさしていることか！隣の地主が神経痛になって、私は汚らしいおんぼろ馬車で、彼のもとに連れて行かれたのです。最もうんざりするのは赤ん坊を連れた百姓女と、退屈に盛る粉薬です」⁽²⁷⁾。(1891 年 8 月 28 日スヴォーリン宛)

気高い人道主義を掲げていただけに、医療の現場での焦燥感や失望も大きかった。それはし

(24) 俸給をもらっていた医師の例としては青木「ジバンコフ」72-73 頁を参照。ジバンコフは医療はゼムストヴォのような公的な組織が、無料で提供するべきであると考えており、個人診療（praktika）には否定的であった。

(25) Chekhov, *Polnoe sobranie sochinenii i pisem: Sochineniia*, vol.10, Moscow, 1977, p.80.

(26) Ramer, op.cit., pp.289-292.

(27) Chekhov, *Polnoe sobranie sochinenii i pisem: Pis'ma*, vol.4, Moscow, 1976, p.266. ここで「百姓女」と訳した言葉の原語は baba である。本稿では、チェーホフが書いた muzhik という表現を、すべて「百姓」と訳している。チェーホフはもっぱら農民を表現するのに、日本語では普通「百姓」と訳される muzhik という表現を使った。このことは、チェーホフの農民観を知る上で重要な手がかりになると思われるが、現在の筆者にはこの問題を探る力量がない。したがって、ここでは muzhik を「百姓」と訳するにとどめる。

ばしば患者への侮蔑となって表れ、ますます問題を大きくした。こうした中、1890 年代初頭にロシアは飢饉とコレラに見舞われるのである。

3 飢饉とコレラ

飢饉が問題になったのは 1891 年の夏ごろから 92 年初頭までである。コレラは飢饉に誘発される形で起こったが、特に被害が拡大したのが 92 年の夏以降である。地域によっては 93 年まで流行したが、チェーホフのいたモスクワでは 92 年の秋には大体終息した。

飢饉の実状は 1891 年夏ごろから明らかになりはじめ、秋には中部ロシア、ヴォルガ川沿岸諸県で深刻な危機に見舞われた。特にこの地域はロシア国内の穀倉地帯だっただけに、国全体にとって大きな問題だった。ヨーロッパ・ロシアにおける穀類の年平均生産高は、1886 年から 90 年にかけて 37 万トンであったのに対し、91 年は 28.8 万トンにまで落ち込んだ⁽²⁸⁾。餓死者が大量に発生し、コレラが蔓延した。『ロシアの飢饉、1891-1892 年』を執筆した R.G. ロビンスは、この飢饉による死者を 37.5 万人から 40 万人と見積もっている⁽²⁹⁾。

前章で述べたゼムストヴォ医療の 4 つの原則に含まれていた問題が、一気に先鋭化したのが 1890 年代初頭の災害であった。まず農民との関係である。前章で述べた③と④との関連でいうと、医師たちは農民との距離を改めて感じなければならなかった。ゼムストヴォ医師の衛生教育とは、具体的には生野菜を食べないとか、食事の前に手を洗うとかといった細かな生活指導であった。こうした指導の背景には、当時の西ヨーロッパの医学、すなわち細菌学などの成果があった。しかし、農民たちはコレラを神の怒りと思い込んでイコンに祈り、相変わらず井戸や川から生水を飲むという例が報告されている。また医師が自らの仕事のためにコレラを蔓延させているのだという噂も出てきたりした⁽³⁰⁾。もともとゼムストヴォ医師が、農民たちの信頼を勝ち取っていたとはいえなかったが、それがコレラのような非常事態の下で一気に噴出したといえる。

ゼムストヴォとの関係でいうと、このとき医師たちは、自分たちに必要な職業上の権限が欠如していることに気がつく。一例を挙げると医師たちは医療助手を任命する権限を与えるよう、ゼムストヴォに要求した。しかしゼムストヴォはこの要求を無視した。ゼムストヴォとの対立もコレラ流行以前から存在していた問題であり、それが大災害により表面化したのである。

チェーホフは飢饉救済の文集のために、『妻』という短編を 10 月から 11 月にかけて書いている。また同じ頃、飢饉についての記事を新聞に書いたり、12 月には義捐金をニジェゴロド

(28) S. G. Wheatcroft, "Crises and the Condition of the Peasantry in Late Imperial Russia", in E. Kingston-Mann and T. Mixter, (eds.), *Peasant Economy, Culture and Politics of European Russia, 1800-1921*, Princeton, 1991, p.136.

(29) R. G. Robbins Jr., *Famine in Russia 1891-1892: the Imperial Government Responds to a Crisis*, Columbia, 1975, p.171.

(30) Frieden, *op.cit.*, pp.147, 151.

県に送ったりしている。年が明けると早速同県に足を運び、調査をした。県知事に会い、飢餓救援促進のための話し合いもしている。ただしこのときの活動は、ゼムストヴォに依頼されたものではなかった。

チェーホフはモスクワに戻った直後、スヴォーリンに宛てた1月22日付の書簡の中で、次のように書いている。

「飢饉は新聞によって誇張されているわけじゃありません。事態は芳しくありません。(ツァーリ) 政府の態度は悪くなく、できるだけの援助をしています。ゼムストヴォは無能か、ごまかしているか⁽³¹⁾です」。

この後のコレラ防疫のときもそうだが、チェーホフの目は基本的にゼムストヴォに対し厳しい。だがそれにもかかわらず、チェーホフはこの後、ゼムストヴォ医師として活動することになる。

こうした飢餓救援活動の一方で、チェーホフは土地の購入を検討していた。チェーホフは3月、モスクワに近いセルプホフ郡メリホヴォ村の地主となり、家族ごと引っ越す。彼はこの地に1899年まで住み、『六号室』『かわいい女』『かもめ』『ワーニャ伯父さん』などの名作を次々と生み出した。だがその1年目は、まさしくコレラ防疫のために費やされることになるのである。

1892年7月6日、ゼムスキー・ナチャーリニクからチェーホフに、ゼムストヴォのコレラ防疫に協力してくれるよう要請があった。チェーホフは当然この要請を受けるが、前述のようにこのとき彼は賃金の受け取りを拒否している。

モスクワ県で最初にコレラ患者が発生したのは7月11日である。セルプホフ郡の広さは2,242平方キロメートルで、113,000人が377箇所に点在して暮らしていた。92年の時点でセルプホフ郡には、チェーホフも合わせて総勢7名(翌93年には8名)のゼムストヴォ医師しかいなかった。チェーホフはメリホヴォ村を中心とした周辺の26の村と7つの工場、1つの修道院を回らなければならないことになる。遠い村はチェーホフの住んでいる地点から20キロ弱離れていた上、川が氾濫して道がぬかるんだりとすると通行不可能になった。当時のチェーホフの様子を、弟ミハイルが次のように記している。

「何ヶ月か作家はほとんど馬車から降りなかった。そんな時、彼は診察に回ったり、自分の家に病人を連れて来たり、文学の仕事をしなければならなかった。くたくたになって彼は家に戻ってきたが、なんでもないかのように、軽いジョークを飛ばしていつも通りみんなを笑わせた⁽³²⁾」。

チェーホフの日課は午前5時から9時まで外来患者を見て、その後村々を回診するというものだった。医療活動はコレラ防疫が第一だったが、他にも腸チフス、ジフテリア、猩紅熱等の患者もやって来た。しかも患者の治療に当たるだけでなく、金持ちや土地の有力者にも協力を

(31) Chekhov, *op.cit.*, p.347.

(32) E. B. Meve, *Meditsina v tvopchestve i zhizni A.P. Chekhova*, Kiyev, 1989, pp.202-203.

仰がなければならなかった。ときには彼らから冷たくあしらわれることもあった。この間チェーホフが実際に診察した患者の数は千人以上と思われる⁽³³⁾。この時期に書かれた書簡は、チェーホフの置かれた状況をよく表している。

「私たちのゼムストヴォは動きが鈍いことで際立っています。重い組織の仕事が医師の上にのしかかってきたのです。＜中略＞ここの住民は教養があって、仲間たちはまじめで気心の知れた人々です。百姓たちはわりと医療に慣れていて、私たち医師がコレラに関して無実であることを説明する必要は多分ないでしょう⁽³⁴⁾」。(7月22日、N.M. リントワリョーフ宛て)

チェーホフのゼムストヴォに対する不満は飢饉救済時から明らかである。むしろ地域住民に気を許していることに目が向く。しかしこの地域では「コレラに関して無実であることを説明する」必要がないということは、他の地域ではそのことを説明する必要があったということであり、やはり医師と農民との間には溝が横たわっていたことがうかがわれる。この書簡からも仕事は楽ではないことが想像できるが、次の書簡はもっと不満に満ちている。

「私は隔離病棟などを建てています。私は孤独です。というのも、とにかくコレラに関することすべてが疎ましいのです。不断に回診し、対話し、こせこせとせわしく働くことを求められる仕事には、辟易させられます。執筆の時間ありません。文学はだいぶ以前にほったらかしにされ、他の医師たちが受け取る報酬を私は自分の独立のために拒否したので、糊口をしのいでいる状態です。私はうんざりしているのですが、もしコレラの上っ面だけ見るのならば、それはとても面白いものに見えるでしょう⁽³⁵⁾」。(8月1日、スヴォーリン宛て)

「私は孤独です」という言葉も、ゼムストヴォ医師に共通する思いだったといえる。最後の一文はこんな時に国外旅行に行ってしまったスヴォーリンに対するあてつけだろう。この書簡を読めば、チェーホフがいかにコレラ防疫を重荷に感じていたかがわかる。だがそれでも、チェーホフはコレラ防疫を続けたのである。

努力のかいあって、近隣で発病した16人の患者のうち、死者は4人であった。10月15日、メリホヴォ臨時医療地区は公式に閉鎖された。次に引用するのは、10月10日、スヴォーリン宛ての書簡である。もうすぐ仮医療区が閉鎖されること、コレラ以外の疫病の患者も診たこと、夏は文学に時間を割けなかったことなどについて触れた後、次のように述べている。

「夏は苦しいものでした。でも、今私には、こんなに素晴らしい夏を過ごしたことは一度もなかったような気がします。秋まで私を捕えて離さなかったコレラ騒ぎと金詰りにもかかわらず、私は生きがいを見出しました。私たちはどのくらい樹木を植えたことか！私たちの文化伝播 (kul'turtregetvo) のおかげで、メリホヴォは見違えるようになり、今では非常に居心地よく、美しく見えます。しかしもしかしたら、実際には何の役にも立たなかったのかもしれませんが。習慣と、なわばりの意識は恐ろしいものです。新しい知己と人間関係を得ました。以前の百姓

(33) Pirumova, *op.cit.*, p.226.

(34) Chekhov, *Polnoe sobranie sochinenii i pisem: Pis'ma*, vol.5, Moscow, 1977, pp.95-96.

(35) *Ibid.*, p.100.

に対する私たちの恐怖が今では愚かしく思えます。私はゼムストヴォに勤め、衛生会議に出席し、工場を回りました—この仕事が気に入りました⁽³⁶⁾」。

チェーホフは今年の夏は今までで最も有意義な夏だったと総括している。文化伝播に関しては「小さな行い」の一環と見ることができる。問題はチェーホフの文化伝播に対する評価で、意味があったと考えているのかなかったと考えているのかははっきりしない。メリホヴォを「見違えるように」したという自負、その一方でそのことにどれほどの意味があったのかという抑えきれない疑念。これは『往診中のこと』のコロリョーフと共通する悩みである。このあたりの心の揺れ、矛盾、充実感と無力感の往復はチェーホフの医療観の根幹をなすものである。

次の「以前の百姓に対する私たちの恐怖が今では愚かしく思えます」という言葉を見ると、以前はチェーホフも農民との間に障壁を感じていたと取れる。もっとも、7月22日付の書簡の中すでに農民たちが医療に理解を示していることを書いているから、この「以前」というのはもしかしたらメリホヴォに来る以前のこともかもしれない。しかしいずれにしろ、農民との間の障壁を取り払えたことが、チェーホフのコレラ防疫に一定の成果をもたらしたことは間違いない。

「この仕事が気に入りました」という言葉は、本心だろうか。おそらくそうだろう。では2ヶ月前の書簡で、あれだけコレラ防疫に対する不満を述べていたのは、何だったのか。それは次のように解釈できる。

チェーホフのコレラ防疫は一定の成功を収めた。しかしそれは手放しで喜べるものではなかった。コレラを防いだこと自体はともかく、その間に行った文化伝播にどの程度の意味があるかはチェーホフ自身にも分からなかった。しかしそれでもチェーホフは「小さな行い」を続けざるをえなかった。実際、コレラがいったん収束した後も、チェーホフはゼムストヴォにとどまり、中風、ジフテリア対策、コレラの再発防止などに努めた。その結果、1893年には、他の7人の医師とともにチェーホフは郡から一等の表彰を受けている。

チェーホフは1894年には陪審員となった。また同年には教会付属学校の世話人になっており、96年から98年の間に学校を3棟建てている。それも単に資金を出すだけではなくて、設計や人集めといった作業も自ら行っている。96年から翌年にかけては、統計活動も行った。94年と97年には郡ゼムストヴォの議員となっている。いずれもゼムストヴォにかかわる仕事であった。

ゼムストヴォは相変わらずチェーホフの思い通りに動いてくれなかった。予算獲得などの面でチェーホフは苦勞している。統計活動では、責任者のゼムスキー・ナチャーリニクが全く仕事をしないことを、日記に記している⁽³⁷⁾。

1897年に発表された『百姓たち』という小説にある、次の一節は、当時のゼムストヴォの

(36) *Ibid.*, pp.112-113.

(37) Chekhov, *Polnoe sobranie sochinenii i pisem: Sochineniia*, vol.17, Moscow, 1980, p.224.

状況を端的に示しているといえるだろう。

『ゼムストヴォ！誰だい！』オシップが言った。『もちろん、ゼムストヴォだよ』。ゼムストヴォはあらゆることで人々から非難された。滞納金、拘束、不作に関して。ゼムストヴォがつまるところ何なのか、誰一人として知らなかったのだが⁽³⁸⁾」。

しかしそれにもかかわらず彼がゼムストヴォにとどまったのは、そこに何らかの意義を見出したからである。「小さな行い」の実践の場はやはりゼムストヴォであった。

だが1897年3月、チェーホフはそれまでにない大量の咯血をする。体力が限界にきていることを悟ったチェーホフは、ついに医師としての活動を止めることを決意する。

おわりに

1892年のコレラ防疫は、ゼムストヴォ医師にとってどのような意味をもったのだろうか。第一に、医師たちはコレラ防疫を通じて、強い職業的連帯感を抱くようになった。コレラ防疫の後、各県に衛生協会が設立される。このモデルとなったのが、チェーホフのいたモスクワ県であった。モスクワ県はコレラ防疫に最も成功した県だったのである。もちろんピロゴフ医師協会の役割も大きくなった。こうして医師たちは他の専門職知識人のモデルとなっていく。この点で、医師たちの社会的影響力は増大した。

第二に、コレラ防疫の後、ゼムストヴォ医師たちの政治的な活動が盛んになった。彼らは自らの手で社会を改革する必要を感じたのである。コレラ防疫後の医師の政治的な活動の例が、1895年の病院法阻止である。これは国が医療を国家官僚制の統制下に置こうとしたとき、医師たちがゼムストヴォの議員たちとともに積極的に反対の請願運動を行い、病院法の施行を無期限延期に追い込んだというものである。しかし、彼らの運動は革命運動のような、急進的な政治運動に結びつくことはなかった。フリーデンによると、彼らが目指したのはあくまでも社会の「改革」であり、「革命」ではなかった。医師たちが政治とかかわりあいをもつようになったのは、あくまでも彼らの職業上の目的を達するためで、イデオロギー的な理由からではない。医師たちはゼムストヴォの自由主義的活動家と共闘したものの、自由主義的活動の方向を左右するには至らなかった。彼らはあくまでも「二義的従属的な存在だった⁽³⁹⁾」のである。

ただし、フリーデンは、医師たちが革命運動と結びつけられるのを警戒して、しばしば医師たちの政治的役割を、過小評価しすぎるように思われる。当時の自由主義的活動家たちが、医師たちの発言に全く影響を受けなかったとは考えられにくく、医師たちはある程度当時の政治運動に影響を与えたはずである。フリーデンの研究自体が、そのことを示している。

しかし、政治運動に積極的にかかわるようになった医師がいた一方で、チェーホフのように

(38) Chekhov, *Polnoe sobranie sochinenii i pisem: Sochineniia*, vol.9, Moscow, 1977, p.305.

(39) Frieden, *op.cit.*, p.175.

イデオロギー的な活動とほとんど無縁だった医師もいた。チェーホフは一応ゼムストヴォの議員に選ばれるが、特に自由主義的な活動をしたという記録はない。このような医師にとって、コレラ防疫によって、ゼムストヴォの社会事業が大きく変化したという実感はなかった。また彼らの行動が、大きく変化することもなかった。1897年には、先ほど引用した『百姓たち』が、翌年には、農民や労働者の生活を根本的に改善することを、「不治の病の治療」と表現した『往診中のこと』が発表されている。チェーホフには、社会を急激に変革することは、不可能なように思われた。しかしチェーホフは、ロシア社会に絶望していたわけではない。例えば、『往診中のこと』は次のように終わる。

「(コロリョーフは)もう近くに来ているかもしれない、人生がこの静かな日曜の朝のように、明るくて喜びに満ちたものになるであろう時代について考えていた。そして、こんな春の朝に上等の馬車に乗って、日光を浴びるのはなんと気持ちのいいことだろうかと思った」。

また、チェーホフは手帖の中に次のような言葉を記している。

「環境、頭脳、精力、関心、年齢、意見の違いのため、人々が平等になることはまずない。不平等はそれゆえ自然の不変の掟と考えなければならない。しかし私たちは雨や熊のような、どうしようもないものでも何とかするのと同様に、不平等を軽微なものにすることができる。この点において、教育と教養は大いに力を発揮する」⁽⁴⁰⁾。

不平等を「自然の不変の掟」と考えたチェーホフは万人平等のユートピアを目指す社会主義に共感できなかった。革命運動により、社会を急激に改善できるとも思えなかった。しかし、社会がいつか変わるであろうことは信じていた。そのためにゼムストヴォに残る必要も感じていた。その信念は、コレラ防疫のようなゼムストヴォでの活動を通じて獲得したものである。コレラの流行は、フリーデンのいうように一部の医師たちを政治活動へ向かわせもしたが、一方ではチェーホフのような医師に、「小さな行い」の正しさを確認させた。その効果が、決して華々しいものでなかったとしてもである。チェーホフは現実にある不平等をそのまま認めるのではなく、不平等を「軽微なものにする」ために努力した。

雑階級人であり、革命思想よりも「小さな行い」を重視したという点で、チェーホフは青木の取り上げたジバンコフと共通点をもつ。ただしチェーホフの医師としての影響力は、ピロゴフ協会の幹部にまでなったジバンコフに比べると、地味なものであった。しかし、チェーホフが残した文学作品や書簡を通して、ゼムストヴォ医師のありようを、より深く知ることができるのである。

10年にわたって交際したといわれるリジヤ・アヴィーロワに宛てた書簡(1899年3月9日付)の中で、チェーホフは次のように述べている。

「私は百姓たちと平和に暮らしています。今まで一度も物を盗まれたことがありませんし、

(40) Chekhov, *Polnoe sobranie sochinenii i pisem: Sochineniia*, vol.10, Moscow, 1977, p.85.

(41) Chekhov, *Polnoe sobranie sochinenii i pisem: Sochineniia*, vol.17, Moscow, 1980, p.9. この箇所は91年の外国旅行の際に書かれ、後に『三年』に使用された。

私が村を歩いていると、微笑みかけられたり十字を切ってもらったりします。私は子どもを除いてみんなに丁寧な言葉づかいをして、一度も罵ったことはありません。こうしたすばらしい関係をつくるのに最も役に立ったもの、それは医学⁽⁴²⁾でした」。

チェーホフは限界を悟りつつも、最終的に、自らの医療活動が決して無意味ではなかったと結論を下した。チェーホフはこの直後、健康上の理由からメリホヴォの土地を手放し、ヤルタに移り住む。チェーホフがこの世を去るのはその5年後のことであった。

(42) Chekhov, *Polnoe sobranie sochinenii i pisem: Pis'ma*, vol.8, Moscow, 1976, p.121.